

2006年度の報告

齋藤直子

『臨床教育学』第8号をここにお届けするにあたり、2006年4月から2007年3月における、臨床教育学講座での主たる成果や催しについてご報告させていただきたい。まず最初に出版活動であるが、矢野智司教授の新著、『意味が躍動する生とは何か：遊ぶ子どもの人間学』が世織書房から出版された。そして、これまでの著作活動の総括として、2007年3月に博士論文『贈与と交換の教育人間学——漱石と賢治における贈与=死のレッスン——』が審査を通り博士号を取得した。大学院生の出版活動としては、井谷信彦「希望、この無気味なるもの——「希望の哲学」再考——」が『教育哲学研究』の第94号に掲載されている。また、京都大学大学院教育学研究科紀要の53号には、井谷信彦「受苦的な経験における生の可能性——O. F. ボルノウ「非連続的な生の形式」再考——」と、高柳充利「カベル『エマソンの完成主義』による教師教育の再構築：哲学—臨床融合型教育学研究」が掲載されている。

その他の講座の教員と大学院生が創り出し、講座の今後の知的・人的発展を生み出すことになった催しとして、特に二つを挙げたい。一つ目は、日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス」のプログラムとして、大学の研究室で行われている研究を中・高生の方々に紹介するために、「人はなぜプレゼントするのか——絵本と物語を手がかりに人間を考えよう」というタイトルのもと行われた、矢野智司教授による講演会である。講演会は2006年12月16日、京都大学百周年時計台記念館の国際交流ホールⅢにて開催された。当日は、矢野教授の講演とともに、絵本や物語にみる「贈与」や「交換」を手がかりとして、本講座の大学院生がそれぞれ中心になって中・高生とグループディスカッションをする時間が設けられた。本プログラムの実施に先立って、矢野教授および大学院生は、各グループのテーマを設定しテキストを選択するために、数回の準備のための研究会をもった。その研究会のなかで、「贈与」と「交換」に関わりつつ、それぞれの院生の研究がより深まるようなテーマとテキストが選び出された（詳細については、教育学研究科のHPを参照されたい）。中高生のみならず大学院生を含めた参加者全員が、新たな人間の問いに出会い、それを互いに深め

合い、さらなる自分の問いへと導かれるよい機会となったことが、本プログラムの最大の収穫であった。

第二は、2006年11月から12月にかけて、イギリス、シェフィールド大学教育学大学院のポール・スタンディッシュ教授を、そして、12月にはアメリカ、ニューヨーク大学スタインハート文化教育人間開発学部のルネ・アルシラ教授をご招聘して企画された「連続講演会」と「大学院生主体の国際会議」である。スタンディッシュ教授の京都大学訪問とご講演、ご授業は、今年で3年目であるが、これまで積み重ねてきた臨床教育学講座の教員、大学院生との学問的交流は年を追うごとに、異文化間交流の名にふさわしい密度の濃いものとなって「臨床教育学」という学問を創り続けている。両教授には、講座での学生指導を含め、学問的対話にコミットしていただいたことに、この場を借りて感謝を申し上げたい。今年度はそうした交流の成果として、講座の大学院生数名が、英語による発表を模擬的、試験的な「国際会議」の場で行った。これらの軌跡を残すために、本号では、特集として「臨床教育学と国際交流」を掲載することとなった。筆者による「序文」に続き、スタンディッシュ教授の発表ご論文、大学院生諸氏の英語発表原稿、そして、連続講演会に関連する日本語の諸論文を掲載している。こうした企画を通じて、大学院生諸氏がゆくゆくは国際的な場でも臨床教育学という学問のアイデンティティを表明してゆけるようになれば幸いである。

本号には、講座の教員、現大学院生、講座の卒業生の論文も数々掲載されている。境界を超えて多彩な声が交わることによって、本誌が臨床教育学の地平がさらに広がってゆく場となることを願い、巻頭の言とさせていただきます。